

聴覚的景観としての能囃子音—〈庭〉から〈座〉への転換前史

小野 芳朗

正会員 工博 岡山大学大学院環境学研究科
(〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1)
E-mail: ono@cc.okayama-u.ac.jp

近世において能は屋敷内の庭、白州上の舞台においてその囃子音が発せられた。それは城下町に流れ近世都市の聴覚的景観（または音風景）の一部を形づくっていたと考えられる。本論では、能囃子音の発生源の空間的構造に着目する。大名庭園、大名屋敷、武家屋敷内の能舞台の実態とその位置、そして能役者の江戸市中の動態と、その演能・稽古の実態より〈庭〉に発せられた音の事例を検証する。それらは、やがて能楽堂として屋内に収容されていく能音を語るときの前史として記述される。

Keywords: Soundscape, Noh, Daimyo garden, Samurai house

1. 緒論

景観という極めて感性的な事項の問題を解く上で、その「場」に付着している「記憶」を再現し、再構築するという視点から、「音空間」あるいは「聴覚的景観」の議論を展開する。「音空間」は時間的に残存しない。音に限らず、モノでないもの、つまり感性は残らない。したがってアラン・コルバンのとった手法のように、歴史資料を積み上げ、実証可能な域で議論すること、換言すれば実証的な資料をもとに論を構成することを試みる。つまり、実証可能な事項に基づき、時間を遡る作業をなした上での景観再構築への道筋を図ろうとするものである。

聴覚的景観の歴史的実証への条件として、以下の項目を明らかにする必要があると考える。①対象の音の発生源の構造、②受容者（音に曝露される人々）の存在、③対象音以外の音環境（相乗効果やマスキング効果）、④対象音の時間的（時代的）継続と空間的拡散、⑤対象音受容の感性。景観と聴覚音を考える時に以上の項目のうち、⑤の感性までを議論するに至るまでの段階に①～④の項目を明らかにする必要があると考える。

本論では、この中で対象音の発生源の空間的構造を中心に論考を進めることとする。時代は近世を中心に、対象音として能の音にスポットを当てた。能を取り上げた理由は、その物語が伊勢・源氏・平家物語に拠る演目が多いこと、また歌舞伎・浄瑠璃の題材の基となるものが能であり、武家・公家から町人・農民までテキストとして共有されていたと考え

るからである。

また発生源としての場合は、網野善彦の指摘を援用し、〈庭＝ば〉¹⁾として大名庭園や武家屋敷を取り上げた。大名庭園は地方においては大名の城郭の中にある大名の独占物であったかもしれない。しかし、記録を読むと大名が必ずしも個人の楽しみとして利用しているのではなく、家臣や御客、出入りの商人、芸人など城中では会うことのできない人々との交流もある。また、備前岡山藩の御後園（明治四年後楽園と改名）では、藩主の江戸在府中は町人農民に庭園を開放し見学させている²⁾。また藩主によってはこうした庶民を庭園中に招き、能舞台を楽しんでいるケースもある。網野はそうした単なる今日的な鑑賞する「庭＝にわ」ではなく、利用され様々な芸能が繰り広げられる動態としての空間を〈庭＝ば〉とよんでいる。

こうした空間的な音の発生源の〈庭〉が近世に町人にも解放されていた庭園や白州上にある能舞台の実態、近代に至ると屋内化され〈座〉となる空間的構造変化を事例をあげて論考する。聴覚という実態が残らない感性的な事象を実証することの資料的限界を前提に、本論では発生源の存在を、岡山大学附属図書館に残る藩政史料、池田家文庫中の文書と図面、また刊行された『梅若実日記』にみる能役者の行跡から検証することとする。

2. 聴覚的景観論と能楽史研究の演者と観客

景観学の視野に音の空間を導入することは、いわゆるサウンドスケープ論として成立してきた。R. マリー・シェーファー [R. Murray Schafer]³⁾ のサウンドスケープの取り上げる対象には、水の音、風の音のような自然音、鳥の鳴き声や虫の羽音のような生命音がある。人工音、生活音にも鍛冶の槌の音や教会の鐘、牧場の羊飼いのホルンなど、これらの「ハイファイな音」の存在をうたったのち、これら心地よい音が産業革命以後の機械音、とくに内燃機関による騒音「ローファイな音」にとって替われらたという。

感性の歴史家とよばれるアラン・コルバン [Alain Corbin] はその著『音の風景』⁴⁾ で、音と人間の問題を歴史的に描写する試みをなしている。それは教会の鐘という「生活音」である。フランスの田園地帯には数万にのぼる鐘楼があり、村落共同体の生活と密着していたことは、それが実用的であるがゆえにこそ、大きな風景の構成要素となっていた。

日本の歴史を失われた事項から再現しようとする渡辺京二が『逝きし世の面影』⁵⁾ で、外国人によって目撃されたかつての日本を著わしている。そこには風景として「音」も鳴らされている。町には雑多な物売りが居た。こうした物売りの呼び声、鳴り物の音が都市の路上の「音」であった。また労働の際には歌が必ずあった。花見は今のような喧騒などんちゃん騒ぎではなく、寛政の頃は歌、浄瑠璃、踊り、俳諧、狂歌などの光景をなしていた。

また中川真は『平安京 音の宇宙』⁶⁾ で京都という都市の音空間について「源氏物語」や「枕草紙」から聞き取れる音の解析や、京都の町中の日常の音、祇園祭の囃子の音の記憶性について述べている。

こうしたサウンドスケープ論の地平に、近世の音として能の舞台空間とそれを鑑賞する者たちの感性を描くことができないかが、本研究の目指すところである。

能の音の発生源とその伝搬を知る上で、舞台の空間的装置、その演者と観客などは重要な手掛かりとなる。芸能史分野においてなされてきた能研究は「文学作品としての能」の解釈が多い。それは研究者が国文学出身者が比較的多いためであろう。実際に演じられた舞台上での「演劇としての能」の歴史に言及するものは未だ少ないのが現状である。近年、歴史学者の中から地方城下町の藩政史料や神社文書をもとに、演能の実態と演者の実像を明らかにしようとする研究が出てきている。

近年明らかにされた賀茂別雷神社文書（上賀茂神社文書）中に書かれている「御戸代能」の分析を行った五島⁷⁾ は、京都の禁裏出入の能役者の実態を、町方の役者であった事を明らかにしている。京都には観世流の片山家（現在の片山九郎右衛門）、金剛流

の野村家（現在の金剛宗家）のように四流の役者が居住していたが、それらはたとえば野村家が阿波藩に出仕していたように、京都外で活躍していた。禁裏御所出入は、川勝家を代表とする町方の役者たちで、彼らは町人の富裕層が謡や舞をはじめ、やがて職能化した者たちという。もっとも四流の京都在住の役者たちも、その源は元禄の町人の間に流行した能の中で町役者が形成され、その中から江戸時代中期以降に四流の家が形成された事を宮本が指摘している⁸⁾。宮本の研究は近世能研究の役者の実像に迫る上では秀逸の大作であり、多くの文書を渉猟したものである。そこにはたとえば、正徳四年(1714)の二条綱元の日記より尾形光琳が二条家の能役者であった事など、禁裏や公家屋敷での能の記録を明らかにしている。また中世の京都での勸進能については能勢朝次の『能楽源流考』⁹⁾ に詳しいが、宮本は江戸期の洛中洛外の勸進能についても、4～7日間などにわたる記録をまとめている。それらは三条や四条の河原、御霊社、北野天神社などにおける観世太夫、宝生太夫や、梅若、春藤、進藤のような能役者、そして町方の能役者が勤めている様子がわかる。観客がどのような構成であるかはわからないが、能音が河原や神社から発生していたことは明らかである。宮本はこの他、和歌山県立博物館所蔵の紀伊徳川家の能役者の系譜を文書より読み解き明らかにしている。

また神原は岡山池田藩の御後園における元禄から正徳の藩主池田綱政の晩年 7 年間の演能記録と観客の動員数を「御後園諸事留帳」より明らかにした¹⁰⁾。さらに西脇は「留帳」に加え、岡山大学所蔵の池田家文庫中の「日記」「日次記」より池田綱政治世時の能の記録より、能役者の実態を明らかにしている¹¹⁾。元禄期、能の全盛時代が訪れるが、その場の役者は主に江戸、京都に在住する職能集団であり、彼らが参勤交代で江戸と国許を往復する藩主に従って移動していることがわかっている。

幕末の江戸の能役者の日常が、明治期の能楽復興の要となった梅若六郎実の日記が翻刻・刊行されるに及んで明らかとなった。『梅若実日記』¹²⁾ は嘉永二年(1849)から明治 41 年(1908)にかけての六郎実の日々の記録であり、能興行、稽古、遊興など幕末から明治にかけて、御用役者であった彼らがどのように変遷していくのかを示した 1 次資料である。

このように歴史学の中で能役者の実像に迫る研究が主に藩政史料、神社文書を中心に分析が始まってきたといってもよい。それは従来の国文学的芸能史研究が歴史学的分析手法を取り入れることで、史料の解説作業が進むにつれて演じられる場と、そこで起きた能ばかりだけでなく宴の饗応や、その接待の模様、町人を含めた観客の実態などが明らかになっ

てくる可能性がある。ただし、史料制限はその藩政史料の解説にある。岡山藩のように公的な藩の資料が岡山大学でマイクロフィルムで公開されているケースは比較的恵まれており、一方で藩主近辺の私生活に伴う資料は岡山市の林原美術館に所蔵され公開されていない。林原美術館で昨年度から調査がようやくはいつたが、なお不明の事象も多く、近世に関する能研究は課題が山積しているといつてよい¹³⁾。

また能を見た側の記録はほとんどないといつてよい。大名家の演能記録には、本論でも紹介するように藩主やその周辺が見たという記録が発掘されるようになったが、町人や農民となるとほとんど記録がない。地方史や民俗学分野で地方文書の調査時に「謡本」は分類「その他」で収集されること多いことから¹⁴⁾ 研究者の関心にかかっていないようだ。能の音の発生源と、音の発した事実をもとに、それから先は物語を「共有した」という事象を延長して音の広がりや「想像」するしかないというのが実状である。手法として考えられるのは、文学者の随筆に鑑賞した記録があるが、これもバイアスがかかっていると考えた方がよい場合が多い。

たとえば、俳人高濱虚子は郷里松山で「春の桜の盛頃に阪の下といつて東雲神社の石段の下を歩いて居ると自分の遥か頭上の松林の中に当って、カン、ポオという大小鼓の音が春先に酔ふた人の耳に、溶け込む様に響いたものである。」¹⁵⁾と書いているが、虚子の実父池内信夫は松山藩の祐筆で、維新後松山の能の復興に力を尽し、実兄池内信嘉は古市公威に誘われて明治30年上京し、能楽復興に尽力する家系で、虚子自身も高濱清の名で能を演じる。能音を耳にすることに敏感であることは否めない。また谷崎潤一郎が京都金剛能楽堂で金剛巖をみて、その金糸銀糸の装束や能面の美しさを『陰翳礼讃』¹⁶⁾の象徴的事象としてえがいているが、これも近代的な屋内空間における陰翳であり、近世は屋外にある舞台で昼間に演じられるため明るい場でみている。谷崎の視線は歴史的なものではなく、近代的な視線であるとみてよい。

以上のように、聴覚的景觀の事象として、芸能の音を取り上げた場合、それが能の場合、近世における発生源、つまり舞台と役者についての研究事例は限られており、その研究の展開が始まったといつてよいのではないか。観客の実像についてはほとんど実態が不明とかがえてもよい。

3. 近世の能音発生源の事例

(1) 岡山藩の庭園

近世都市において武家屋敷内に「能舞台」が存在したことは、その興行記録から推定はできるが、それが様式通りの能舞台であったかどうかは明らかでない。また屋敷内、あるいは城内家屋中に舞台が設置されている場合は絵図上からその存在を判別しがたい。屋根を戴いた能舞台の様式から、本来屋外や庭園中に独立に建設されたことが推定できる。現在の屋内の「能舞台」（すなわち「能楽堂」）が屋根を戴いているのは、庭園内に存在した「能舞台」の様式を引き継いだものである。舞台周囲の白砂利は、かつての白州の様式を残しているものである。白州に能舞台が建てられることが多かった。白州の舞台脇正面には、町人や農民の席として位置づけられ、現在みられる能楽堂の観覧席とみることができる。

たとえば江戸城では「町入能」として庶民にも能興行を解放していたこともあり、本丸入り口にその存在が見える。この能舞台は、本丸の表に入ったすぐの白州の庭の中に建てられた屋外のものである。大名たちの詰め所であった大広間から観覧する構造になっている¹⁷⁾。もうひとつ、能舞台が本丸中奥に確認できるが、ここは白州の面積が著しく小さい。したがって、多くの者に公開する場ではなく、これは将軍御側の者のためのものと考ええる。その他、地方都市の城中のものとして、姫路城三ノ丸の屋外に確認できる¹⁸⁾。肥前鹿島城本丸高津原屋敷内の屋外能舞台¹⁹⁾、二条城二の丸の寛永時の図面にも御広間から観覧する舞台と楽屋が記されている²⁰⁾。また禁裏御所中に寛永の絵図では東の御学問所の外の庭に能舞台が見える（小堀遠州作事）が、延宝時の火災後、岡山藩が単独で修復した延宝の改築後にはこの東側の空間は池水を備えた庭園となる。禁裏では盛んに能の興行が行われたが、その能舞台は建物内へ吸収されたらしい²¹⁾。伊予松山城でも能舞台が三ノ丸に完成していることが記録からわかるが、建物内にあったようで、図面上からは同定できない²²⁾。

その池田家の国元、岡山では藩主綱政の時代に城東の旭川を隔てた御後園（現在の後樂園）において能が催された。御後園は元禄二年（1689）春に一応の完成をみて、その年に田植祭が催される。そして元禄四年に園内の御茶屋で能が催された²³⁾。

元禄四年（1691）閏八月十四日の「日次記」に記事には、

一 今日於御茶屋ニ初而御能被遊ル、池田大学・日置猪右衛門・池田兵庫・小仕置・近習・物頭拜見被仰付、辰中刻初り申下刻相済

とあり、午前八時に始まり午後五時前に終わった。番組は「邯鄲」「野々宮」「小原御幸」「松風」「放下僧」「三井寺」「船弁慶」。このうち綱政自身が「邯鄲」

と「船弁慶」のシテ²⁴⁾を、実弟の鴨方藩主信濃守政言が「野々宮」「放下僧」を、残りを能役者と思われる者がシテを勤めた。御相伴したのは池田大学のような家老以下、側近の者共である。この御茶屋は園内の藩主の居所、「延養亭」付近であったとおもわれる。当初は座敷を使つての能であったとおもわれる。

その後、元禄八年(1695)岡山城本丸表書院内に能舞台が作られ、能の興行は約12年間そちらへ移る。岡山大学池田家文庫中、元禄年間の城内絵図²⁵⁾には庭園に能舞台が描かれている。大書院である「招雲閣」十三畳が綱政の執務室になるが、そこから庭園へ抜けると能を観覧する造りになっている。

綱政は70歳となった宝永四年(1707)、御後園に新たに能舞台を建設した(図-1)²⁶⁾。図中、斜めの廊下(橋掛)が見える構造物が能舞台である。その上方の座敷が「延養亭」という藩主の御座所であり、さらに上方の庭園に臨んでいる。能は舞台の右方、「栄唱の間」より拝見された。舞台左方の建築群は御後園の役所、奉行たちの仕事場であり宿所である。同年九月二十二日²⁷⁾、舞台披きの能番組は、辰の刻(午前八時)より「翁」、「高砂」、「田村」、「江口」、「芦刈」、「鞍馬天狗」、「邯鄲」、「金札」。間に狂言を五番入れて、申の刻(午後4時)に終了した。「江口」は綱政の十八番であり、彼の残した「諷形図」には自筆で「江口」の君の船より下りた場面とその詞章が書かれている²⁸⁾。

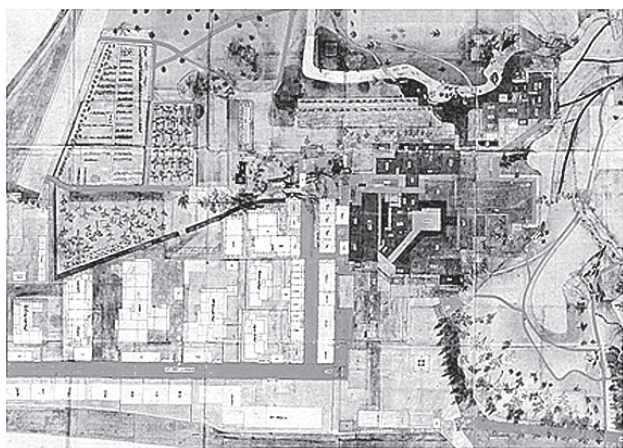


図-1 御後園の能舞台

正徳年間、池田綱政晩年の図面と推定され、当時の空間構成をほぼ正確に表しているものと考えられる。(岡山大学所蔵特殊文庫、資料掲載許可岡大情サ第49号)

このときから綱政が亡くなる正徳四年(1714)までの7年間の興行記録が「御後園諸事留帳」に残されている²⁹⁾。その数145回、ほぼ一月に2回の頻度で興行している。能組には綱政自らがシテを勤めたものも含め、辰の上刻(午前7時)から申の中刻(午

後4時)まで狂言を含めて約12曲を演じた。これらに招待されたのは家老や士分、その家族、出入りの商人に加え、城下の町人、農民の男女が大量に招じられる。その数は400人から1000人で、男性よりも女性が多い時も頻繁にある。この観客がどこに座ったのか。先の図-1をみると、身分ある者は舞台周囲の建物の座敷に收容されたことは想像できるが、町人や農民の着座スペースである白州が図面から1000人を收容できるものとは考えられない。脇正面白州空間を多くとれるほど橋掛が長く描かれているわけでもない。

この能舞台はその後、綱政の継嗣、池田継政の時、建て替えられる。享保十七年十月十七日「御城に有之候崩御舞台、御後園ニ取立候様、万代団右衛門・谷川一之進・千賀万右衛門江被仰付候、」とある。城中舞台の移転を指示したものである。同年十一月晦日、「御柱立有之、古御舞台御取立ニ付、御規式無御座ニ付、奉行、役人平服」で御神酒、御熨斗を供えた。この作事は十二月十七日になって「御日柄能、御舞台御上棟御座候」と完成した³⁰⁾。

享保の図面³¹⁾の能舞台周辺も同様の広さの白州空間がみえる。継政は能興行を町人に開放しなかったため、彼らを收容するスペースを作らなかったと考えればよいが、正徳の図面は綱政晩年のものとされ、その收容スペースが狭いのは、「留帳」記録の招待人数と比較して考えにくい広さである。考えられるのは、観客は交代したことである。これは江戸城本丸の町入能が午前と午後が交代だった例が記録され(宝生九郎)、御後園でも何回かに観客を分けた可能性がある。もうひとつは舞台を囲む建屋の外側から観た、あるいは聴いていた観客が多かったのかも知れない。

城中の庭における能舞台を発生源とする能音は、白州空間に招じられた人々は直接聞き、あるいは観たものであった事例をみた。能の音はその囃子の音の大きさ、謡の大きさなど空間的にある程度大きな広がりをもつと考えられる事は想像できる。岡山の御後園の周辺は、西側が岡山城下である。城内には武家屋敷と町人町がサンドイッチ状に南北に並んでいた。東側には上道郡の農村地帯が広がり、また山陽道が東側を北上していた。東南部は門田屋敷という新規に開発された武家屋敷群である。これら半径1kmの城下の町や村に月に二回の興行の音が聞こえた、という記録はみつからない。後の記録で後楽園の音の伝搬距離を推しはかることとして、明治時代の内田百間の記録を参考してみる³³⁾。後楽園の鶴の鳴き声を毎朝聞いたという百間の記録は、彼の自宅が後楽園付近にあり、鶴が園内のどこで鳴いていたのかはわからないが、近くて300m、鶴が延養亭付近にいたとすると800mの範囲となる。能の囃

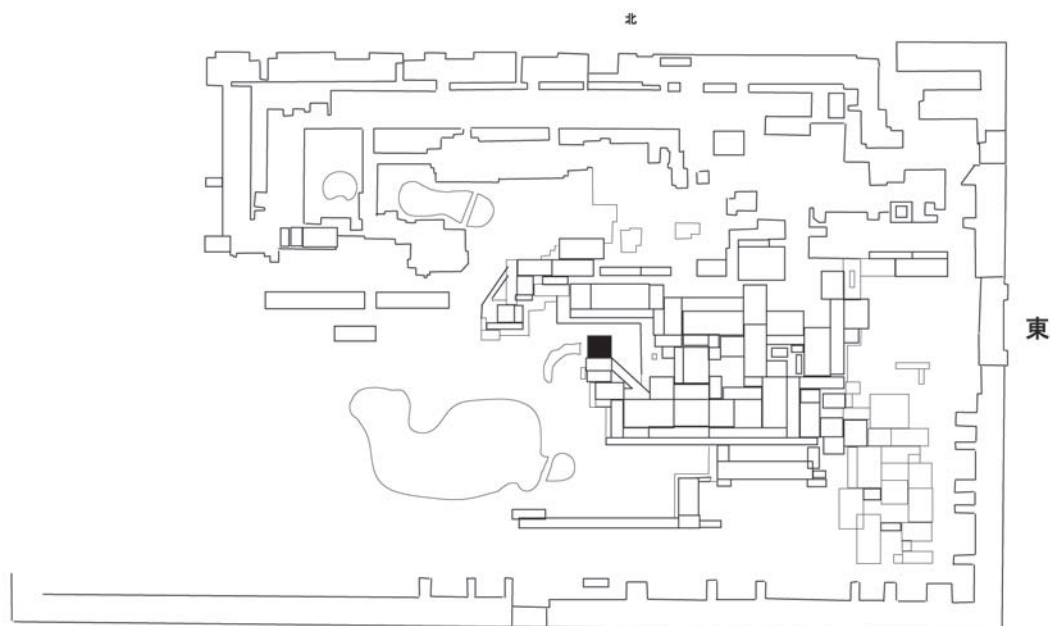


図-2 池田家江戸上屋敷（小野芳朗トレース）

子の音は鶴の鳴き声と同等か、あるいはそれ以上の大きさと思われるので、これくらいの範囲には聴こえていたと推測される。能舞台の位置から 300 から 800m ならば城下の町には風向きにもよろうが、聴こえていたと考えられる。

(2) 江戸上屋敷の事例

それでは能舞台から発せられる能音を曝露される条件として、観客が席に着くための空間、白州について江戸市内の屋敷の例を考える。

備前岡山藩主池田家の江戸上屋敷において、五代将軍綱吉への代替わりのため、老中を接待するために二つめの能舞台を建設したという記録が残っている³⁴⁾。池田家上屋敷は江戸城大手門付近、現在の地図上では東京駅丸の内の「丸の内ビル」の場所がそこにあたる。

その屋敷内の図面を 図-2³⁵⁾ に示す。この図には能舞台が図面中央■に記されている。常の興行や稽古がこの舞台を使ってなされたものと考えられる。延宝の老中接待には、この他に仮舞台を造作した。記録によれば、延宝八年(1680)十一月「同五日縄張仕之廿四日刈作事初ル十二月十九日切組仕廻当二月朔日出来」とある。翌九年(1681)にできた舞台は、

御書院前弓場所之西ニ構之三間四方。外ニ半間ニ三間之付御露し。一間半に三間の後座。者しかかり七尺ニ五間。楽屋三間梁ニ六十六間。三間五間のかか見の間に五間の用事場。を馬場ヨリ西御座縁江楽屋構へ西御座敷。所ニ構之舞台可か見の間ハ可け寿ての約束ニ仕之。楽屋并用事場

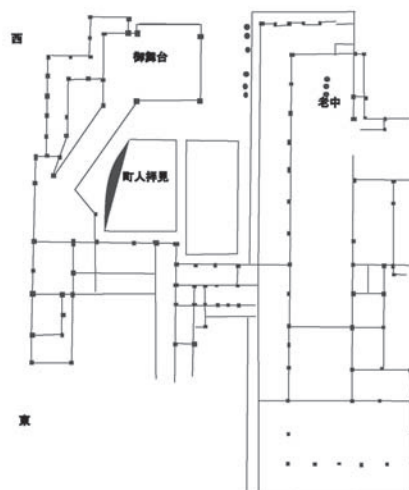


図-3 池田家上屋敷仮設能舞台（小野芳朗トレース）

ハ御能過毀之約束仕之³⁴⁾

とあり、小書きには仮舞台とともに、三間四方の舞台と地謡座、囃子方の座る後座、橋掛、鏡の間、楽屋、用事場（作り物を組み立てる場所）の大きさが書かれている。これは、図-2 の上屋敷の図面で見ると、既設の能舞台の下側、大きな池の右に見える空間に、図面上、北側の廊下のある座敷を正面席として建設された。

この接待は、同年二月十二日、時の老中であった稲葉美濃守正則、堀田備中守正俊、板倉内膳正重種が主賓であり、前老中、留守居役、その他旗本・御側衆が客であった。老中より御盃を下された者共は家老の池田大学以下十四名。その着座の様子は、こ

の延宝の將軍代替の招請記録には残っていないが、次の六代家宣の代替であった宝永七年(1710)11月16日の池田藩上屋敷における図面から推定できる。宝永度のものを図-3に略記する³⁶⁾。能舞台の正面、つまり「階」の正面の位置に主賓が着座し、以下主賓の左へ居並ぶ。主賓の右側は、屏風を以て仕切りがなされ、そこでは屋敷の御相伴衆、つまり女性達が観覧した。舞台脇正面の白州上には「町人拝見所、下に板を敷き畳を敷く」とある。白州は町人の拝見する空間として位置付けられる。つまり、仮舞台の建設は老中招請能のときに町人を招待するがために、池田家の常設舞台の他に作ったと考えてよい。常設舞台は藩主の私的使用のものであり、図-3に見るように白州空間は小さい。そのことは鏡の間と三間四方の舞台をつなぐ橋掛の長さにも表れている。仮舞台では町人用の白州スペースをもったがために橋掛も長くなっている。

当日の番組は、式三番で「翁」を観世三郎二郎、「三番叟」を鷲仁右衛門、「弓八幡」同じく三郎四郎、「船弁慶」喜多七太夫のところ、腫物でき欠勤。俄かに「兼平」金春八左衛門、「井筒」金春太夫、「船弁慶」は観世久米助左近実子童形とある。その他、脇方に春藤源七、進藤権右衛門らが呼ばれている。当時の江戸在住の太夫家筋の能役者が動員されていることがわかる。彼らの装束は「烏帽子素襖」の正装であった。

御老中御着座被成。長熨斗鮑出之浅野瀬兵衛持出之。此時戸田備後守御誘引。殿様御老中列座之半へ御出。今日御出之御一礼被仰之。熨斗鮑三方撒之即刻面箱持出之申樂初ル。

この短い記録は宴の始まりを簡潔に書き切っている。御客のひとり戸田備後の誘いにより藩主池田綱政が挨拶をなす。そして三方に乗せた熨斗鮑を撒くや、「翁」と「三番叟」の面である白色尉と黒色尉が入っている面箱が持ち出される。面箱は客席で持ち出されたと読める。そして殿様の手から縁側の下で控えていたであろう「翁」の出演者、「千載」あるいは面箱持の役に渡され、彼は「階」を上がり、舞台に座っている「翁」役の観世三郎四郎に手渡す。「階」は飾りではなく、座敷にいる御客の空間と舞台を白州でつなぐチャンネルであったと考えられる³⁷⁾。この老中招請時の能は機会としては將軍代替という稀なケースではあったが、江戸市中の大名屋敷での能興行の様子を伝えている。その配置は囃子や謡の音の空間を表わし、番組は音の種類を同定することが可能である。番組の途中から延々と料理が饗応されるのであるが、空間を埋めた音は御囃子と謡であり、町人も脇正面に陪席した。

この屋敷の位置が現代の丸の内ビルに相当するこ

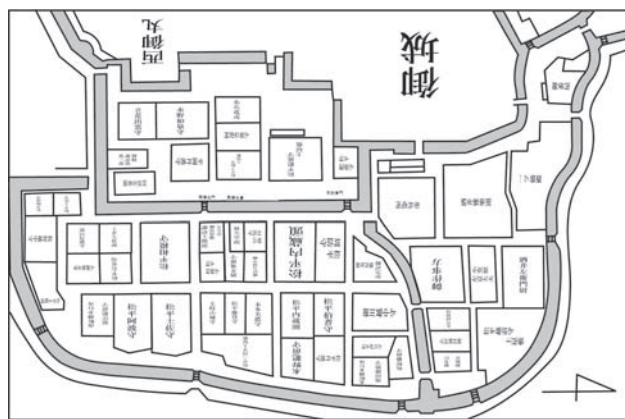


図-4 大名小路(小野芳朗トレース)

とは先述したが、図-4に示す慶応元年の江戸切絵図によると³⁸⁾、馬場先濠に沿った馬場先門と和田倉門の間にあり、池田家の上屋敷(松平内蔵頭)は、堀に面した道に沿って、絵図の縮尺をそのまま適用すると南北100m、東西200mの敷地だったと推定できる。

一方、岡山大学池田家文庫所蔵の「江戸御屋敷・御向屋敷絵図」元禄十六年(1703)は升目の紙に屋敷配置図を描いたもので、その縮尺を信用できるものとしてみる。常設の能舞台(図-2の■)は南北の敷地のほぼ中央にある。仮設舞台の位置は、屋敷の境界まで約25mの位置にあったと推定され、これが屋外であることから、老中招請の数日間の興行の様子は、屋敷外の「大名小路」という御曲輪内の町へも聴こえたことが想像できる。

このような老中招請の能は、他の大名家でも行われ、その為に老中の日程確保に各藩が神経を使い、キャンセルや早々の退席も記録されている。町人もそれなりに上屋敷に招待されたとすると、かなりの能の興行が町人も含めて経験したと推定できる。またこうした町人を招じた町入能の記録は江戸城本丸におけるものは、池内信嘉の『能楽盛衰記』³⁷⁾にも紹介され知られたことではあるが、大名屋敷内での記録が明らかになったことは、他の大名家を含め、將軍代替わりのような慶事には町人を招聘した興行がなされ(池田家文庫の記録ではその後の將軍代替わりの老中招請記録も残っている)、仮舞台を建設して直接町人が見聞きする機会があったことがわかった。そして別に大名屋敷内に能舞台が常設されていることは幕府式楽としての能の興行があったこと、あるいは稽古としての囃子や謡の音の発生源が江戸市中に点在していた事を窺わせる一端となる事実が明らかとなった。

(3) 江戸市中の能の音

それではどれくらいの能音が江戸市中に点在していたのであろうか。江戸市中は大名・旗本をはじめ

として武家屋敷が大きな面積をしめていた。そうした武家屋敷内では能を稽古として、あるいは座興として、そして正規の接待や法事・御祝儀としてなかば日常的に「能の音」が鳴っていたと推測する。「能の音」とは、素謡の場面での「謡」、あるいは御囃子の場での「笛」「小鼓」「大鼓」「太鼓」、そして「謡」、そして御能の場面でのそれらの囃子と謡の音のことである。素謡、舞囃子、御能は目的により演じられる場面が異なるが、日常的には謡や囃子の楽器の稽古がなされていたと考えられる。

こうした音が市中に屋敷内から漏れ聞こえていたとしても、どれくらいの頻度であったのかを推定することが可能であろうか。ここでは、幕末の能役者、梅若実（六郎）の日記を頼りに、彼が毎日どのような行動をとっていたのかで、彼のような能役者が江戸市中に住まい、活動していたという積算を推測することによって江戸市中の能の音に触れてみたい。

梅若実（みのり）は隠居名で六郎は梅若家世襲の名である。文政十一年（1821）上野寛永寺用達鯨井平左衛門の嫡男として生まれ、観世流ツレ方梅若六郎家へ養子ではいり、嘉永六年（1853）六郎氏実となる。明治の能楽衰亡の時期にあつて東京に残り、岩倉具視らと能楽復興を手掛けた人物で、能楽史的に重要な人物である³⁹⁾。彼の日記により、江戸市中への能の音の動きを推測したい。

梅若六郎実は、稽古を観世宗家に出かけ受けていた。表-1 に嘉永三年（1851）の六郎実の九月から十二月の記録を列記する⁴⁰⁾。日付の次欄は梅若実の出かけた先で名前はその屋敷である。その右の欄は自宅を訪問してきた者の名をあげた。能役者は年中いずれかの武家へ出稽古に出かけたり、自身の稽古で出かけたり、あるいは自宅に稽古の訪問を受ける。そして時として幕府や大名家の能の催事に向けて集中的に稽古し、リハーサル（申合）を経て本番を迎える。梅若六郎は幕府式楽としての能の太夫家筆頭であった観世家のツレ方であったがため、出演となると観世宗家とともに参画するのが常であった。したがって、表にみるように「師家稽古」とは日常の六郎実の稽古が時折あるのに対し、何日か連続してあるとそれは江戸城本丸における能の催しであったりする。この時期の江戸城本丸では、九月五日の有徳院（八代将軍吉宗）百回忌が表の能舞台で行われた。その他、この嘉永三年には三月二日に公家衆御馳走（本丸表舞台）、四月廿日西丸中奥舞台、同廿三日同所、五月九日宮様御馳走（本丸表舞台）、同十五日日本丸中奥能が記録されている。本丸の表における能舞台は公式行事の時に使われるものであり、中奥や西丸奥は将軍家の内輪での能である。

将軍家御用以外にも、この年、複数の大名家の能や、十月廿六日のように済海寺での能がみられる。

その他、神保・小笠原・中川・美濃部・大沢・根岸・鶴殿・田中・加藤・遠藤などは六郎実が出稽古に参上している武家である。稽古には礼金が下されるからこれらの武家は六郎実の収入源でもある。こうした出稽古は謡であつたり、囃子の稽古であつたりしたようだが、時に出かけて行っても当主の都合により中止になることもあり、また六郎は複数の家を廻る日もあつた。また六郎自身の稽古として、観世流宗家（師家）の他、山階滝五郎宅へ通っている。その他、自宅へ稽古に来る者も記録されており、それらの名前が記されている。このように、この年 23 歳の若い能役者は江戸市中を廻り、「能の音」を発していた。彼のこの年の娯楽といえは両国の花見、亀井戸・向嶋へ遊んだこと、浅草猿若三丁目へ芝居に出かけたこと、尾張徳川家隠居逝去につき鳴物停止で生業ができずに鎌倉へ大仏参詣に出かけたことくらいで、あとの日々はいずれかで能に関わっていたのであつた。

安政五年（1858）、六郎実 30 歳の年、彼の出稽古は激減している⁴¹⁾。江戸城における能は、御奥（中奥）における御囃子（一月十八日、二月二日、二月十八日、三月十八日、同廿五日、十二月廿五日）と勤め、十月朔日には将軍代替の御祝儀能（十四代家茂）で本丸表舞台に出勤、十二月二日将軍宣下大礼の能に同所に出勤。他は田安御殿の昇進祝儀能他は目立った出稽古もなく、もっぱら宗家に稽古に出かけることと、幸五郎次郎（小鼓の家）宅へ頻繁に稽古に出かけている。幸家での稽古がツレ方²⁴⁾としての稽古なのか、鼓の稽古なのか不明である。この年はコレラが大流行する。安政の虎列刺は江戸市中で 10 万あるいは 26 万人の死者を記録したとされる⁴²⁾。六郎実の日記にも同年八月廿五日に「甚敷疫流行」とあり、長崎で蘭医ポンペが見たコレラ⁴³⁾は、七月八月の暑い時期には江戸市中で猛威をふるっていた。おそらくこのために武家では交流を控えていたのではないか。さりながら六郎実、この年は御呼ばれが少なかったためか、浅草へでかけ、楊弓や芝居、芸者と思しき者を呼んでの食事を盛んに経験している。この安政五年はそのような事情で伝染病という特異的な状況下であり、おそらく江戸市中の能の音は少なかったと考えられる。この翌年から六郎実の活動は旧に復して忙しくなるのである。

慶応四年（1868）は彼ら幕府の太夫家筋の能役者にとっては大変の年であつた⁴⁴⁾。すでに大政は奉還され、鳥羽伏見で徳川軍の敗北が決まっている。上方での事情を知らず実の日記には、慶応四年正月朔日を「晴天。誠ニ長閑」とある。しかしこの年はほとんど彼ら能役者の仕事はない。しかも二月五日鳴物停止の令がでる。その理由も期限も示されず「日合之義ハ無之。追而御沙汰迄之由」であつた。そして

四月十四日官軍大総督有栖川宮が江戸城西の丸へ入城との記録がある。江戸無血開城である。五月十五日上野彰義隊の戦ののち、江戸は平定され八月九日東京と改まる。九月九日明治と改元。梅若六郎実 41 歳の年、鳴物停止は収まったものの、自宅での稽古・袴能程度しかできない有様であった。

嘉永三年を例として、実が能の勤めで通った場所の総計は江戸城中を含めると、42 カ所である。このうち、観世宗家は当然ながら、稽古、申合のため 54 回、ついで小笠原佐渡守、田中唯一、大原主馬、神保伯耆守、美濃部筑前守などの武家屋敷が各々 17～20 回通っている。この回数は年によって事情が変わり、かつ能役者の成長とともに通う場所も質も異なってくると考えるべきなので、数は統計的数字とは考えにくい。目安程度であろう。

ちなみに幕末にどれくらいの役者がいたのであろうか。明治維新で朝廷に差し出した幕府御抱えの役者は、喜多流、観世流のシテ・ツレ・ワキ・狂言・囃子方²⁴⁾ 合わせて 79 名の名前がみえる⁴⁵⁾。その他、金剛、金春、宝生太夫にも役者が存在したので、おおよそ総計 200 名前前後が存在したであろうか。彼らの業態と、個人の動きが数えられないので単純な計算は不可能だが、毎年 200 人前後の役者が、年数十カ所を複数回にわたり移動し、能本番や申合、稽古をなしていたと考えられる。これらは幕府御抱えの役者であるので、各藩にも専属の役者（必ずしも太夫筋ではなく、家臣の中から能方として拔擢もした）が延数十人の単位で存在していたと考えられる。（数十人という単位は、能組一曲あたり 20 人前後の人数が舞台上と舞台裏で必要であり、それが一日 5 番から 7 番あるため推定される規模である）具体的に江戸市中のどの場に屋敷があったのか同定することが困難なため、地図上に表現できないが、数量的にはかなりの頻度の能音発生の機会が江戸市中にはあったと推測される。

4. 近代の能音空間の屋内化

太夫家筋（観世・金剛・金春・宝生・喜多）のプロ集団の仕事場は江戸が中心である。全国の武家が集中する町が演能センターであった。それが慶応四年官軍の江戸進駐とともに、能役者の解雇となる。一部の者は朝廷に仕えることを希望し許されるが⁴⁶⁾、朝廷がスポンサーとなるには余裕もなく、事実上の休業状態が明治元年を通して続く。そして明治二年の紀州赤坂藩邸の能興行は短いながらも、久しぶりの囃子の音を江戸市中に流したことになる。

その明治二年（1869）七月二九日、英国皇太子を迎えた紀州赤坂藩邸では、宝生九郎の世話により、

「弓八幡」喜多勝吉、「経政」観世鐵之丞、「羽衣」宝生九郎、「小鍛冶」金剛唯一が能舞台を勤めた。ただし「御急ニ付」夫々半分だけ舞う半能であった。それでも「鐵之丞殿初而ノ御用ニ付悦ニ廻ル」⁴⁷⁾とある。戊辰の年、官軍の江戸進駐以来途絶えていた、そして明治政府になって初めての公式の能興行に失職にあえぐ太夫家筋の能役者が呼ばれたのである。その後、明治政府により能は復興の途に就く。しかし、それを担った階層は旧公家・大名であった。米欧を回覧した岩倉具視は、明治 5 年（1872）パリ郊外ベルサイユ宮殿に至りオペラを観る。こうした芸能を文明国は持っていて、それを国家（すなわち貴族層）が経済的に支えている。それを日本も持つべきだと岩倉以下観覧者たちが考えたことは想像できる。岩倉に随行し、『米欧回覧実記』を著した久米邦武は記述する。

然るに欧州の宮殿にある、その壮麗なオペラ座を見るに至って、痛切に国民娯楽の必要を感じ、而してかかる精神上の慰藉から種々な結果を来す娯楽には、一時的流行のもの、今日あって明日なきもの、又は外来の浮ついたものでは所謂立派なものは出来ぬ、どうしてもシツカリと国民性の奥に根を持って居るもの、即ち日本固有の歌舞音曲でなければならぬ。若し此選択を過ったなら、国民の娯楽の欠乏から、日本は非常な不幸に陥らねばならぬ、と、其処で能楽の芸術的価値を思ふに至った。⁴⁸⁾

岩倉たちの欧米回覧の途からの帰国後、梅若実や金剛唯一（金剛太夫）らの自宅に於ける能舞台での興行や、岩倉邸での天覧能など、単発的に能の復興のきざしがみられる。明治 9 年（1876）4 月 4 日から 6 日まで、岩倉具視邸で坊城俊政の差図で明治天皇御幸のもと能が催される。午後 1 時より 5 時半までであった。4 日のシテは「小鍛冶」を従四位前田利邇、「橋弁慶」を正三位前田斎泰が勤めた。梅若実「土蜘蛛」を勤めた⁴⁹⁾。

明治 11 年（1888）、明治天皇は青山御所に舞台を建設し、観世清孝・宝生九郎・金剛唯一・梅若六郎（実）・三宅庄市に宮中能御用掛を命じた（これに観世鐵之丞・金春広成が加わる）。同年 7 月 5 日青山大宮御所御舞台開御能で彼らがシテを演じる⁵⁰⁾。

明治 12 年（1879）7 月 8 日、米国前大統領グラントが来朝し、岩倉邸で午後 3 時より 5 時半の間に「望月」の半能と数番の仕舞を観てこれを激賞したとされる⁵¹⁾。

明治 14 年（1891）、能楽社の結成とともに、芝公園内に能楽堂が完成する（明治 35 年（1902）、靖国神社へ移築、九段能楽堂となる）。能楽師たちが、流派に関わりなく、同じ舞台で興行することが復活する。もともと、四流一座とはいえ、江戸時代の能の

表-1 梅若実の行動

嘉永3年9月から12月

嘉永3年

	参上 □	訪問
9月朔日	師家稽古	
9月2日	師家稽古	
9月3日	小笠原弥八郎様、師家 稽古	
9月4日	師家稽古	
9月5日	御本丸御表能(有徳院 様百回御忌御法事)	
9月6日	根岸英八郎様、小笠原 佐渡守様、田 中唯一様	菊之進
9月7日	小倉様	
9月8日		
9月9日	中川勘三郎様、美 濃部筑前守様	
9月10日		
9月11日	神保伯耆守様、根岸英 八郎様、鵜殿様、藤井 で鼓種古	菊之進
9月12日	菅沼様、小倉 様、西脇 東左衛門、山 階滝五郎様、権 田遠江守様	
9月13日	小倉様、徳太 郎之宅、小倉様	
9月14日	弓丁	
9月15日	神保伯耆守様、美濃部 筑前守様	
9月16日	大沢新六郎殿	
9月17日	日吉広之丞宅	
9月18日	根岸英八郎様、美 濃部筑前守様	
9月19日	小倉様、小笠 原佐渡守様	
9月20日	師家稽古	
9月21日	中川勘三郎様	
9月22日	大沢主馬様	
9月23日	小倉様、菅沼 様、鵜殿 様、神保伯耆守様	
9月24日	師家、西脇東左衛門、根岸英八郎様、美濃部筑前守様	
9月25日	師家稽古	
9月26日	師家稽古	
9月27日	小倉様	寅之進、浅田浅 三郎
9月28日	鵜殿様、根岸 英八郎様、田中唯一様	
9月29日	師家稽古、中川 勘三郎様、美濃部筑前守様	
10月朔日	根岸九郎兵衛様、美濃 部筑前守様	
10月2日	小倉様	浅三郎 菊之進 寅之進
10月3日	菅沼様、西脇 東左衛門、大沢主馬様	
10月4日	神保伯耆守様、中川勘 三郎様	源兵衛
10月5日	大沢主馬様	力石平吉
10月6日		
10月7日	田中唯一様、根岸英八郎様	藤田勘助 菊之進 浅三郎
10月8日	師家稽古	
10月9日	菅沼様、加藤 様	
10月10日	師家稽古、中川 勘三郎様	
10月11日	小笠原弥八郎様	
10月12日	師家稽古、神保 伯耆守様	
10月13日	西脇東左衛門様、美濃 部筑前守様	寅之進、勘助
10月14日	済海寺能(真観院様法事)	
10月15日	根岸九郎兵衛様、鵜殿 様	
10月16日	中川勘三郎様、小笠原 弥八郎様	
10月17日	師家稽古	
10月18日		
10月19日	大沢主馬様	
10月20日	西脇東左衛門様	
10月21日	菅沼様、根岸 九郎兵衛様、猪八郎	
10月22日	神保伯耆守様、美 濃部筑前守様	宅稽古
10月23日	師家稽古、田中 唯一様	
10月24日	師家稽古、中川 勘三郎様	
10月25日	師家稽古	
10月26日	清海寺真観院様、加藤 遠江守衛内、兵 藤源右衛門	
10月27日	菅沼様、鵜殿 様、田中 唯一様	
10月28日	小笠原佐渡守様	
10月29日	菅沼様、美 濃部筑前守様	
10月晦日	中川勘三郎様	

	参上 □	訪問
11月朔日	鵜殿様、田中 唯一様	
11月2日	加藤新五左衛門殿	平吉、勘助
11月3日	大沢主馬様	
11月4日	神保伯耆守様	
11月5日	山階滝五郎稽古	
11月6日	日吉重太郎	
11月7日		
11月8日	加藤新五左衛門殿	
11月9日	大沢新六郎殿	
11月10日	師家稽古、中 川勘三郎様	
11月11日		平吉
11月12日	中川勘三郎様	
11月13日	徳太郎	
11月14日	弓丁、西脇東 左衛門、小笠原佐渡守様	
11月15日	神保伯耆守様、鵜殿 様、田中 唯一様	堀尾半大夫 山下源四
11月16日	中川勘三郎様	
11月17日	大沢主馬様、田中唯一様、鵜 殿様	
11月18日	加藤様	
11月19日	猪八郎、根岸 九郎兵衛様、美 濃部近江守様	
11月20日	菅沼様、西脇 東左衛門	
11月21日	神保伯耆守様	
11月22日	加藤新五左衛門殿	
11月23日		
11月24日		
11月25日	鷺伝右衛門宅	
11月26日	師家稽古	
11月27日	師家稽古	
11月28日	師家稽古	
11月29日	薩州様能	
12月朔日		
12月2日		
12月3日		
12月4日		
12月5日	田安御殿能	
12月6日	日吉猪八郎宅	
12月7日	加藤新五左衛門殿	
12月8日	神保伯耆守様、根岸 九郎兵衛様、美濃部筑前守様	
12月9日	中川勘三郎様、小笠 原佐渡守様	
12月10日	師家、山階滝 五郎稽古	
12月11日		
12月12日	師家稽古	
12月13日	菅沼様	
12月14日	鵜殿様	
12月15日	師家稽古	
12月16日	師家申合	
12月17日	師家稽古	
12月18日	御本丸中奥能	
12月19日	師家稽古、小 倉様、芦 屋様	
12月20日	師家稽古、美 濃部近江守様、神保伯耆守様	
12月21日	西御丸中奥能	
12月22日	遠藤但馬守様、曲 淵求馬様	
12月23日	加藤新五左衛門殿	
12月24日	小笠原弥八郎様、田中 唯一様	
12月25日		
12月26日		
12月27日	芦屋様	
12月28日	本多越中守様	
12月29日		
12月大晦日		

興行は、六番から七番の演目を各流で分担しているのが普通である。明治になってできた「共用の」能楽堂において、各流派が共演するのは不自然なことではなかった。

それはやがて、流派ごとに舞台を建設するようになるのである。明治25年(1892)、観世清廉は飯田町に舞台を、明治30年(1897)、宝生会猿楽町舞台、明治33年(1900)観世会大曲舞台、大正4年(1915)牛込富久町に金剛宗家舞台、大正7年(1918)、細川侯爵邸舞台で金春流の月次会が始まるなど、流派の独立性が各流の舞台開設とともに強まっていく。

明治になって失職した能役者たちは、舞台も失った。武家階級が消え、侍屋敷の管理もされなかったためだろうか。後述するように梅若実の日記をみるかぎり、官軍が江戸に進駐した最初の一年間は能の興行は皆無である。わずかに、11月になってようやく自宅の舞台で袴能をはじめたのみである^{5 2)}。しかしながら梅若実の明治2年(1869)時の日記をみると、前年はたとえ止んだ能興行もいくつかの屋敷で行われるようになっている。

近代能楽堂の建設を建築史的に研究する奥富は、この青山御所舞台を「木子文庫」による分析から、正面に玉座があり、その他白州には床几が並べられたという。天皇以下洋装であり、したがって椅子席による観覧が屋内で始まったのがこの青山から始まったと示唆する^{5 3)}。

能が旧貴族階級からスポンサーを別に求め始めたとき、音を発する場の変化がみられた。能の音は屋敷や庭園内<庭>にあり、それらが市中に分散していた。能役者達はそれらに出かけて行って演じた。それらが武家階級の消失とともに、再編され、能役者が流派ごとに独立して興行する場<座>として、独自の能舞台をもつようになっていったのではない。能の音は分散<庭>から集中<座>への道を辿ることになったと考える。

5. まとめ—<庭>から<座>へ

近世の都市における聴覚的景観の発生源として、能の音とその舞台の空間的構成ならびに能役者の動態について事例をあげて史料的に考察した。近世の庭、大名屋敷における舞台は、白州の上にある構造物であり、屋外で昼間、音を発する装置であった。そして、江戸市中の屋敷内の音は外に漏れる機会も考えられ、かつ時に町人が多く観覧した。そうした能舞台を武家屋敷がもち、そこへ能役者が稽古や能組のために通った。つまり、近世の能音は様々の屋敷の中の<庭>において発生していた点在する数多くの音であった。

本論で事例検証できたのはこの点までである。その後、近代になり、このシステムが消滅し能役者は彷徨う。そこで起きる能楽復興運動の行き先は、消えた屋敷内の舞台から、流派ごとの舞台への転換であったようだ。流派ごとに舞台を築き、そこで能を演じ、客が観覧に訪れる。まさに岩倉がベルサイユで見たオペラ座のように<座>をつくるのである。言い換えれば、<座>にでかけなければ能の音に接することはない。またそれは集中した<座>である流派ごとの舞台の音になる。

本論の課題と展望を以下にあげる。

1. 近代能空間の閉鎖化：屋外にあった能舞台が屋内の能舞台となっていく過程は、共用していた舞台が流派ごとの舞台に変わっていく過程でもある。ここに能における近代家元制の成立の問題をはらんでいると考える。
2. 受容する側の実態が不明であるが、役者のスポンサーが武家から素人へ、給金から弟子の出す稽古料に変換することで音を聞く対象も変わってきた。これも近代家元制と関連する事項と考える。
3. 薪能の演出は夜の興行としたもので近世にはほとんどない。近世は夜は興行を原則として行わない。薪能や屋内におけるほの暗い陰翳を礼賛するのは近代的視線であり、近代のどこかで価値を付着された可能性がある景観である。
4. 武家の能だけでなく、また京都のように町方の役者のみならず、辻能という形でいわば大衆演劇のような形のものが流行していた。鏡花、虚子、子規の目撃した「照葉能」と呼ばれたものもそのひとつである。町人や農民が何を本当に観て聴いていたのか、課題が残る。

参考文献

- 1) 網野善彦「中世「芸能」の場とその特質」、『演者と観者』所収、日本民俗文化体系、小学館、昭和59年
- 2) 『御後園諸事留帳』岡山大学附属図書館池田家文庫、神原邦男翻刻、吉備人出版、1999年、享保年間藩主池田継政の江戸参府中、御後園（現在の後樂園）は町人にしばしば参観させている。
- 3) R. Murray Schafer(ed), 1978, The Vancouver Soundscape, A.R.C. Publications, Vancouver
- 4) アラン・コルバン『音の風景』小倉孝誠訳、藤原書店、1997年
- 5) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社、2005年
- 6) 中川真『平安京 音の宇宙』平凡社、2004年
- 7) 五島邦治「御戸代神事と猿楽能」『賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版、2006年所収
- 8) 宮本圭造『上方能楽史の研究』和泉出版、2005

- 年
- 9) 能勢朝次『能楽源流考』岩波書店, 昭和 13 年
 - 10) 神原邦男『大名庭園の利用の歴史』, 吉備人出版, 2003 年?
 - 11) 西脇藍『岡山藩主池田綱政と「能」』吉備人出版, 2005 年
 - 12) 『梅若実日記』, 八木書店, 2003 年
 - 13) 林原美術館の池田綱政に関する文書は, 2007 年夏に神原邦男が調査に入り, その成果の一部が同年 10 月に同所で企画展「池田綱政」として公開された.
 - 14) 京都大学人文科学研究所共同研究「近代古都研究」における神戸市外国語大学 長志珠絵氏の指摘による.
 - 15) 高濱虚子『能楽遊歩』, 昭和 17 年 6 月 丸岡出版社
 - 16) 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』昭和 8 年, 中公文庫所収
 - 17) 『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共惣絵図』東京市史稿所収
 - 18) 「播州姫路城図」中根家蔵, よみがえる日本の城四 姫路城, 学研, 2004 年所収
 - 19) 「高津原屋敷図」佐賀県立図書館蔵, よみがえる日本の城二 肥前名護屋城, 学研, 2005 年所収
 - 20) 「二条御城城中絵図」中井家蔵, よみがえる日本の城一九 二条城, 学研, 2005 年所収
 - 21) 藤岡通夫『京都御所』, 中央公論美術出版, 二一頁「寛永度御造営内裏指図」, 二七頁「延宝度御造営内裏指図」
 - 22) 『松山城』, 松山市役所, 昭和四五年. あるいは「松山城三ノ丸図」松山市子規記念資料館蔵
 - 23) 神原邦男『大名庭園の利用の歴史』吉備人出版, 2003 年, 324 頁
 - 24) シテは能の主役, ワキは脇役でシテと問答する役柄が多い. ツレはシテの連れで登場する. その他, 狂言方が物語の進行を語ったり, ワキとの掛け合いをこなす. 囃子方は笛, 小鼓, 大鼓, 太鼓で構成される.
 - 25) 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫 元禄十三年辰三月御改 『御城内御絵図』
 - 26) 『御後園地割御絵図』正徳年間, より能舞台周辺の絵図. 藩主の居所であった延養亭近くにあった. 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫蔵 T-121-1, 2
 - 27) 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫 宝永四年九月二十一日 『日記記』
 - 28) 池田綱政筆『顰形図』は林原美術館蔵. 『岡山後楽園史』資料編, 平成 13 年, 岡山県郷土文化財団に掲載
 - 29) 神原邦男『大名庭園の利用の歴史』641-671 頁, 池田綱政の御後園における能の興行の拝見者数と御能組
 - 30) 『御後園諸事留帳』享保十七年十月十七日, 同

- 年十二月十七日, 神原邦男編, 吉備人出版, 1999 年翻刻版
- 31) 「御後園地割御絵図」岡山県郷土文化財団所蔵, 『岡山後楽園史』, 平成 13 年掲載
- 32) 宝生九郎の懐古談, 明治 38 年に江戸城町入能は中入りで町人は交代となった. 池内信嘉『能楽盛衰記上巻』196 頁, 東京創元社, 平成 4 年復刻版
- 33) 「古里を思ふ後楽園」『内田百閒全集第六巻』113 頁, 講談社, 1971 年
- 34) 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫 延宝九年辛酉二月十二日「御老中御招請日記 初日之記」, C-6, 54
- 35) 「江戸御屋敷向屋敷絵図」元禄十六年, 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫蔵
- 36) 宝永七年十一月十六日「御老中御招請日記」岡山大学附属図書館蔵池田家文庫所収.
- 37) 池内信嘉『能楽盛衰記』附録「徳川家町入能之図」には正面客席と能舞台階の間の白洲空間は赤い毛織でつながれ両脇に武士が数名着座している.
- 38) 『嘉永・慶応江戸切絵図』人文社, 1995 年
- 39) 『梅若実日記』, 第七巻, 八木書店, 2003 年所収「林和則の解題 6 頁」
- 40) 『梅若実日記』, 第一巻, 八木書店, 2003 年, 「嘉永三年」
- 41) 『梅若実日記』, 第一巻, 八木書店, 2003 年, 「安政五年」
- 42) 小野芳朗『＜清潔＞の近代』, 講談社選書メチエ, 1997 年. 71 頁. 「諸宗院死者書上写」を引用した数字. 26 万人は江戸人口の 4 分の 1 にあたり過大であるとされる.
- 43) ポンペ・ファン・メールデルフォールト『ポンペ日本滞在見聞記』沼田次郎・荒瀬進訳, 雄松堂出版「新異国叢書」, 1969 年
- 44) 『梅若実日記第一巻』, 八木書店, 2003 年, 「明治元年」
- 45) 『梅若実日記第二巻』明治元年 8 月 13 日
- 46) 『梅若実日記第二巻』明治元年 8 月 13 日, 朝廷へ奉公願を喜多六平太以下 28 人が提出した.
- 47) 『梅若実日記第二巻』, 明治 2 年 7 月 29 日
- 48) 久米邦武歴史著作集 第五巻 吉川弘文館 第一編第十「能楽の過去と将来」明治四四年
- 49) 『梅若実日記第三巻』明治 9 年 4 月 4 日
- 50) 『梅若実日記第三巻』明治 11 年 7 月 5 日
- 51) 『梅若実日記第三巻』明治 12 年 7 月 8 日
- 52) 『梅若実日記第二巻』明治元年 11 月 10 日以降, 梅若宅で稽古能が始まる.
- 53) 奥富利幸「明治初期における能楽堂誕生の経緯」日本建築学会計画系論文集, 第 565 号, 337-342, 2003 年 3 月

(2007. 10. 9 受付)

Sound of NOH Play as a Soundscape in Urban Area

—Pre History on Exchange from <Garden> to <Theater>

Yoshiro ONO

The sound of Noh play such as flute, drums and songs were played in the Noh stages in Daimyo gardens and Samurai houses. In this paper, the structure of the Noh space as the stage is focused as the source of the sound. The Noh stage in Koraku-en garden, Okayama, and the stage in the garden and Daimyo houses are discussed as the examples by using historical archives. The documentation of Noh player in Edo city is formed on the sound in the play and exercise.